

門 凡 8
3072
卷 1

113
3072
1-2

大扶桑國考序

大齋平先生奉

帝道惟一之皇誥。學顯幽分二之

神道。而其器環朗。其識英逸。不

東筆如水。著書如止。議論拔山。精

純。淘金固不待隆明等之贊也。



○大扶桑國考序

○一

大扶桑國考

垂聽

東叡山大王之奉觀而眷顧有
年焉。若夫古史及徵靈真枉等
數部。往來既回。豐田少進。而
諸府內。大主感賞。特育恩賜。邇者大杖乘

國券及三五本國券二部。繕寫
已成。使隆明復獻之。大王照覽。數日。從宮謂隆明曰。方
今古學大振。俊士崛起。然未嘗
聞有撰彼外邦之載籍。而明我
神州之典教者也。今也乃有此

撰夫可謂足治末學之舊弊。為
後進之木鐸矣。吾將更以一
部。備於
僂洞乙亥之御覽焉。隆明謹而承
慈旨。乃退以傳諸先生。先生率爾
且喜且泣曰。嗚呼。翦莪之談。庸

夫之息。誠無徒棄焉。而久辱
眷顧。更奉。是教。何幸加焉。冀
為我道。誌其。教旨。以為之序。
隆明唯。不敢。以。不敏。辭焉。削
廁方成。於是乎。筆此事。以冠其
首。云。

同ト見度也。其見る人一の様をたゞばなも
有る家こそ譬のふるまきこと有るよりて先いふ
也。こゝル氣吹屋の平田吾兄オモヒ識高く学博きハ
其まはぢぢらなるかむ久書。まさやうなる論書。
こゝらみ巻こ。皆人の見知まはとこゝるなれん。
今さう言言筆や。然るそ乃考論シレヒ奇なり
幽る哉さぐり。妙なり顯る哉きまめて。世人の

思慮の外よ出る事ども多よよりて。はやしが
いづらぬ人も有らう。いで是を彼高山の見
度よると言む。平田吾兄の見度ハ。普通ヨソツネの
みまらうふをいづび。もとよりまづれする利眼
なるうへ。選とえらむ。磨とみづける遠鏡をさへ
取そへ。天そは高峰の絶頂タカキハハミよ立て。日経ヒノタテ日緯ヒノタテ。四
方八方遍く見さげ見とほし。潮の八百重乃

直眼タビメと遠鏡との間は思はるまで。と。後ノチとあ
まマさサかカしシきキが。鏡乃善悪をえらラうウべベとら
磨くマるルはハ知チらラずズて。心ココロふフ依ヨるル新メ奇ヅきラレ
方カタ又マタ此ココよヨアアきキそソいイけケ。彼カ此コをヲさサへヘ見ミらラぬヌと
まマぎギらラしシ。ばバてテハハ海ウミゆユきキ陸チゆユくク本ホつツ道ミチをヲもモ。
何ナニやヤあアちチやヤせセむムと。そソれレ遠トウきキ慮リョりリ何ナニやヤあアむム
とトいイふフ。おオのノ力チカラなナくク足タビ弱ヨクとトいイふフ。阪サカ中ナカよヨだダふ

至らツぬヌ。されレどド時トキ何ナニりリてテ峯ツノ上ノへヘ登ノりリ得トクらスむム
りリハハ志シとト見ミてテ一ヒトがカくクとト志シてテ一ヒトがカくクとトあアらラぬヌ
とトかカらラなナいイ思オモひヒのノまマじジらラぬヌ事コトみミ何ナニやヤしシとトもモ吾オレ兄ケイ
能ノくクとトいイふフ。とト同ドウじジ事コト何ナニりリよヨ。其ソノ言コトきキこコもモこコらラ
打ウつツ何ナニもモ其ソノ書カキみミらラぬヌ思オモひヒ何ナニもモてテ。林ハヤシ鹿カがカらラぬヌ。
やヤまマのノ山ヤマ上ノへヘかカけケてテいイろロりリてテ共トモにニ見ミ度タクしシ。
遠トウ鏡キョウをヲもモかカりリ見ミらラぬヌちチとトいイふフ。いイれレとトもモ

樂しくもおぼゆるあり。板本スリマキなるをさう
ふも言はレまカ稿本シタガキまで全うぬとこそ出
見つ。何れ利眼ともはまほしき男。大き見と
うレたかくこそほれふと。うレやレこレはあり。
此度これの大扶桑國考板本よハふる。序文ハレブミ
そよとらレむおとされレる。をレむレおレめレのレをレ板。
靈ある心学の兄弟と。おとレまレらレぬレる事レの

うレれレまレよ。拙きも思レぎレて。いレぞレ此考は妙よ
奇レく。仰レぎレ信ヨルべきよし。或はやある序文は
くりてと。其詞おもレ回レらレはレとレ思レひレく。
さレしレとレはレぬ人の二巻二巻を。カレのレまレりレはレ著
出レるレむレむレよレこそ。其レをレほレめレめレて。とレらレまレやレ
しレる序文をも添レえ。吾兄のうレまレてハ何レむレらレの
態レをレほレむレびレ本論ありモの別記ソレなるレ也。とレら

島田藏書

くぬくひしそく。拙き詞ふまきむらほやどり。
書まきらしむらむと。必吾兄の意よむら
た。や序詞もあはれ有と。くぬくひさふ
おのれが思むらむと。かくくく
しき長言を。書はげけむらむら。

天保七年八月 伊勢 大神安守

大扶桑國考上卷



大壑 平篤胤撰述

門人

備前國 業合大枝
遠江國 關 武雄
上總國 大高秀明



校同

諸越古書モロコシも成ナリ閑クニを依ヨり。其國の古傳説小。東方大荒外
小。扶桑國と稱イはる神眞の靈域。君師此本國に在アり。その國
初小出興せし。三皇五帝あど云ふは。謂イハゆ依扶桑國より出
て。万城の道字開ヒラたある趣サシ小聞キコゆる字。採トり集アツめて熟マク小稽カキ
ふ依ヨり。其扶桑國としも謂イふ依ヨり。畏カシきや吾が天皇命スメラミコト此神
形シロシメら知食シメは。皇大御國スメラオホミクニ此事小して。其三皇五帝と聞キコえし

○大扶桑國考上卷

一

は我が皇神等小形も御坐しり依。其を固よて然るはき道
理あるを。今そ此由緒を述て。あかも天照坐大御神の本於
御國の大御光字輝さむと爲る小。既に此方此古人さち。其
扶桑と云ふ哉。皇國の漢名を爲して。詩賦文章の類も往
往用ひ。その三代實録。清和天皇紀。僧宗睿が傳此文。八年
同。舟解。歸。著。本。朝。天。慶。六。年。の。日。本。紀。竟。宴。哥。橋。朝。臣。直。幹
此。序。に。聖。上。纂。統。天。下。無。為。扶。桑。之。域。歸。仁。細。柳。之。鄉。慕。化。云
云。あと言へ。尚。古。き。詩。文。此。集。等。を。見。て。知。べ。し。但。し。日。向
風。土。記。に。大。足。彦。天。皇。之。世。幸。兒。湯。之。郡。遊。於。丹。裳。之。小。野。謂
左。右。曰。此。國。地。形。直。向。扶。桑。宜。号。日。向。也。と。有。る。云。此。國。地。形
直。向。日。と。詔。ひ。り。む。を。か。く。文。詞。せ。る。あ。り。其。は。宜。号。日。向。と
ある。小。て。あ。り。聞。え。う。て。然。れ。ど。此。は。扶。桑。を。皇。國。ま。る。歌。文
の。名。と。爲。さ。る。例。と。を。異。あり。思。ひ。錯。ふ。屋。ら。ら。ま。る。歌。文
此。集。紀。事。の。書。此。名。小。も。負。せ。る。依。字。近。世。の。學。者。ふ。ち。は。其

を非と論ず。依も許多あり。然れど此を古人は。皇國を當
依が實小叶ひて。其を非と云へる後人の論ぞ。却て非小
を有り。扶桑字皇國小當の依書名は。紀齊名朝臣の扶桑
集。藤原長清朝臣の夫木和歌集。皇圓法師が扶桑略記。水戸
殿此扶桑拾葉集あど是也。中。小。も。夫。木。集。を。そ。の。奥。書。に。
見えて。扶桑集と名けよを有り。其。由。字。黃。門。為。相。卿。了
語。さ。し。う。ば。扶。桑。を。日。本。國。の。總。名。あ。れ。む。憚。あ。り。扶。字。此。於
くり。桑。字。の。木。字。取。り。て。夫。木。集。と。名。け。ら。ま。よ。と。有。し。小。從
子。の。由。見。え。下。學。集。に。扶。桑。國。日。本。摠。名。也。朝。嗽。必。昇。於。若。木
扶。桑。之。梢。故。呼。日。本。云。扶。桑。國。也。や。い。ひ。日。本。紀。纂。疏。に。凡。吾
國。名。通。和。漢。有。一。十。三。と。云。る。中。に。六。日。扶。桑。國。東。海。中。有。扶
桑。兩。幹。同。根。日。所。出。故。借。用。と。あり。此。を。非。と。せ。る。説。を。松
下。見。林。の。異。稱。日。本。傳。并。沢。長。秀。が。俗。説。辨。あ。ぢ。小。見。え。て。未
小。論。ふ。が。如。し。然。て。堪。裏。抄。破。取。盧。島。の。條。に。兼。名。苑。云。扶。木
一。名。方。四。一。名。方。出。と。云。る。事。も。あ。れ。ど。其。所。出。を。知。ら。ま。る。

○大扶桑國考上卷

斯カクて扶桑と云ふ名レ。古フルく彼國籍クニジミ小所見ミと云レ。山海經ヲを
了レ。此經の海外東經ヲ云ふ篇ヲ。竝ナラば出せる地名國名ヲ。み
ち皇國分内ヲある由ヲを稽カカへ明アキラむれト。扶桑と指サシふる國の皇
國ヲあることヲ。甚イト詳カクめぞ知るめレ。抑ソク是經はも漢ノに劉歆ガ校
定レ。此表ヲ。禹定九州ヲ。而益等類物善惡ヲ。著ス。此書ヲ。皆聖賢之遺事ヲ。
古之明著者ト也ト記シ。王充論衡ノ。禹益竝治洪水ヲ。禹王治水ノ。
益主記異物海外山表無遠不至ヲ。以所聞見ヲ。作山海經ト云ハ。
早く周代ニ書ル。列子ノも引ク。此文有レ。此コトよなき古書ノ
ゆク。中小周代ヲ加ス。予シ文ヲ何レ。はハ漢代ノ加ス。予シ。此篇も
有レ。其ヲ判然トある事ヲ。依テ字ヲ。後人ニ是義を得レ。知らズ。此書を

疑ウタガひる倫トモも多クの依テ。漢ノに攷カク予シ。依テ者ヲあり。然ラるト清ノの姚
書考ノ。山海經ノ漢志ノ不著ト。撰人ノ名ヲ劉歆ト以テ為ス。禹伯益ノ撰ル可ク笑フ。經
中ニ言フ。夏后氏ノ殷王ノ文王ノ且言フ。長沙零陵雁門諸郡ノ縣ノ歆ノ不知レ。欺
誰ヲ乎ト。此蓋シテ秦漢間ノ人所レ作ル者ノ人ノ已多ク論ス之ヲ矣ト云ハ。四庫全書
提要ノ及ヒ簡明目錄ノも同説ヲ。司馬遷ノ稱ス之ヲ。則チ亦周秦以來
之古書也ト云ハ。司馬遷ノ稱ス之ヲ。則チ亦周秦以來
史公曰ク。至ス禹ノ本紀ノ。山海經ノ所レ有ル怪物ノ。余不敢テ言フ之ヲ也ト有ル。在
云ハ。るト。まハ。偽書考ノ。人ノ已多ク論ス之ヲ。云ハ。予シ依テ。杜佑通典ノ鄭
樵通志ノ。胡元瑞筆叢ノ。あハ。どハ。早く論スへル。を謂フふル。考ス。
爰コト小ノ近頃ノ清ノに畢沅ガ校正本ヲを見レ。列子ノ按テ夏革ヲ以テ為ス。夷

堅カク所ノ志ヲ。又夏革曰ク。大禹曰ク。地之所載ス。云ハ。四十七字ヲ。是經海外
南經ノ文ヲ。又呂氏春秋本味篇ノ。按テ伊尹ノ說ヲ。多ク取ル。此經ノ。夏革伊尹ノ皆
湯時ノ人ト。則チ此經ノ為ス。夏書ノ無ク疑ハ。故チ自唐以前ノ劉歆ノ奏ヲ。王充論衡ノ。
趙曄吳越春秋ノ。皆チ以テ為ス。禹益ノ所レ著ス。博物志ノ曰ク。太古書ノ。今見存ル。有ル。

神農經。山海經。水經注曰。禹著山經。淇出沮洳。又曰。山海經創
 之大禹。紀錄遠矣。鄭玄注尚書。服虔注左氏春秋。皆用山海經。
 疑此經自杜佑始。と云るは。期せばして余が意小適せる説
 明也。あふ條く小精しき辨あり。此經を讀む人必その校正
 本小就て見べし。然れど其注を未しき事ども多うり。
 まゝ按て依り。隋書經籍志小。漢始。蕭何得秦圖書。後又得山
 海經。相傳以爲夏禹所記也。と云。依事も有る。され漢代小此
 經の傳はまる由來あり。今そ此海外東經此全文。本書の
 次第は隨小擧て。説著にちと左の如し。いづや。日むかしは
 大樹オホキのもやれ神カミのこころ。四方ヨモは木くらの言コトや免て聞キけ。
 山海經海外東經云。騶邱爰有遺玉。青馬。視肉。楊桃。甘相。甘

華。甘果。所生在東海。兩山夾邱。上有樹木。在堯葬東。

本經此文比上小標して。海外自東南。陬至東北。陬者云ハ
 了。第一了是。騶邱を出せり。在堯葬東。と云。依て。是東經より
 前ある。海外南經の終わ小。狄山。帝堯葬于陽。帝嚳葬于陰。と
 有。依山を云。明き也。諸注了其所在詳あらば。然れども。彼國
 小て海内東南と指はる。豫州を中せちて。揚州を云ふ域を
 謂ひ。まゝ海外北東南と指せきは。必わが筑紫國を謂ひ例
 あれむ。禹貢の時。揚州東面の中邊あり。東江。携李。明どの
 海嶋小。堯葬あり。むや推慮也。但しかく定むる由也。大荒
 南經。帝堯。帝嚳。帝舜。葬于
 岳山。と有る。郭注了。即狄山也。と云ひ。其山了並べて有。申山
 者。大荒之中。有山名曰天臺。高山。海水出焉。と載せる山也。疑

あく舟山補陀山を云ふと聞え。海水出馬とは灌門海の事
字云ふと聞ゆる字以て。如此を思ひ定めし。但こを實に
葬所は非也。郭注。按帝王冢墓皆有定処。而山海經往
復見之者。蓋以聖人久於其位。仁化廣及。至於殂。四海無思
不哀。故殊俗之人。各起土為冢。是以所在有焉。亦猶漢
氏諸遠郡國皆有天子廟。此其遺象也。と云るが如し。是邊
了正東北荒外子。直徑小推求むれ。海上三百里餘。ふして。
我が筑紫の薩摩國。穎娃郡。此海門岬也。大隅國大隅郡。佐多
岬。此處小至る。疑邱と謂ふを疑く。此處あり。其を兩山夾
邱とは。海門岬を佐多岬と小交まれば。櫻嶋あり。を謂ふと
聞え。海門岬小謂ゆる海門。嶽也。此所小神名式
出ふる。枚聞神社也。國史。小は開聞と書れ。今此山字
と謂ふ。開聞の字音より。稱ひ來れる。或は此所のさま
海門とも云。於べき形あれ。別子かくも稱せる。や。或書

穎娃郡。一名空穗島。在上。樹木あり。云。牙依也。櫻也。
城謂へる。是知。盈のら。其。疑邱。此所の畢沅が注。淮南
小。彼国の東北方外。赤水の事を云ひて。昆侖華邱。在其東
南。楊桃。甘櫨。甘華。百果。所生。と有りて。高誘注。皆異物也。と
有るを云ひ。昆侖也。釈名。小丘。下成。曰頓兵。再成。曰陶丘。三
成。曰昆侖。とあ依を思ふ。昆侖華邱と云。依。開聞の嶽を。
薩摩富士也。稱ゆる事。よ。思ひ合さる。れ。あり。山海經。
ふ。本海外北經の末。ふも。平邱。とて。相類。する。邱。字。出。せり。然
れ。ど。其。え。華。邱。は。は。て。遺。玉。青。馬。以下。此。諸。品。を。注。せ。ら。る。は。
訛。傳。也。聞。え。し。り。今。此。考。小。し。も。要。知。事。あり。下。の。條。く。も。此。準
了。て。知。し。

大人國在其北。爲人大。坐而削船。奢比之尸。在其北。獸身人
面。大耳珥兩青蛇。

大荒東經了。此國を出せ依るは東海之外。大荒之中有山名曰大言。日月所出有波谷山者。有大人之國也。有まゝ大荒北經了有人名曰大人。有大人之國。釐姓。黍食。云くと有るも。畢沅が言ふ。此似秋海外東經大人國也。と云ふが如し。然るも。釐姓と云ふも。本文に劉歆が校文了。一曰在騶邱北と云ふ。然る小同じ筑紫内了。謂ゆる騶邱の北了當了。日月此出依所也。も言べき大山也。日向國霧嶋山あり。然れば大人の國とは。此邊を言ひしと聞えあり。まゝ波谷山也。謂ゆる法華山れど字云ふ。亦大荒東經小大言山の外了。日月所出也。云ふ山を合虛明星鞠陵倚天壑明此五山あり。皆高山也。名と聞ゆれど。何の山くを云ふ。知が。而郭璞傳了。今の本文小を註を加す。大荒東經此有大人之國と有依所了。按河圖玉版曰。從昆侖以北九万里。

得龍伯國。身長三十丈。生五八千歲而死。此文を列子張謹が注了引るは長四十丈。從昆侖以東。得大秦人。長十丈。皆衣帛。從此以東。十里。得中秦國。長一丈。穀梁傳曰。長翟身。橫九畝。載其頭。眉見於軾。即長數丈人也。秦時大人見臨洮。身長五丈。脚跡六尺。準斯以言。則此大人之長短。未可得限度也。と云ふ也。まゝ晉永嘉二年有鷲鳥集於始安縣。南北里之鷲。陂中民周虎張得之。木矢貫之。鐵鏃其長六尺。有半。以箭計之。其射者。人身應長一丈五六尺也。又平明別駕高會語云。倭國人嘗行遭風吹度大海。外見一國人皆長丈餘。形狀似胡。蓋是長翟別種。箭殆將從此國來也。とも云ふ。今此を考ふる。河圖外有龍伯國此事を早く列子湯問篇に夏革が語ふ。天帝加之五神山を禺疆に命じて。大鼈小戴る。志免給へ依事を云ふ所了。龍伯之國有大人。舉足不盈

數歩。而暨五山之所。一釣而連六鼈。合負而趣歸。其國灼其骨。以數焉。張謏注了。數。筆計也。以。高下周圍三万里。山。而一鼈頭之所戴。而此六鼈復為一釣之所引。龍伯之人能并而負之。又鑽其骨以卜。計此人之形。當百餘万里。鯤鵬方之。猶蚊蚋蚤虱耳。則大虛之所受。亦奚所不容哉。と云。一鼈頭と有る一を三の誤写ありて。其を本書の全文を見る。於是岱輿。員嶠。二山。流於北極。沈於大海。仙聖之播遷者。巨億計。帝憑怒。侵滅龍伯之國。使阮侵小龍伯之民。使短至伏羲神農時。其國人猶數十丈。と有るを云。亦あまど。此を今の本文に大人をば。固より別みして。此より引出き事非也。然るは夏革が此を是より前より殷湯が物有。巨細乎。有。修短乎。有。同異乎。と問。予亦依りて。巨細の別を論さむ。為。ま。於。大壘。此。大。字。説。き。の。於。此。龍。伯。人。と。焦。僥。人。の。長。短。異。ある。事。及。び。然。て。下。小。鯤。鵬。の。巨。大。を。焦。僥。此。微。細。と。を。比。論。せ。依。り。て。焦。僥。人。を。ば。

殊り東方と云れど。龍伯り東方と云ざるを思ふ。斯く。是。焦。僥。人。を。東。方。也。云。る。は。故。実。何。故。事。あり。其。を。三。五。本。国。考。第。三。條。の。附。録。了。云。ふ。字。見。て。知。べ。し。儲。こ。の。焦。僥。人。本。拠。の。事。れ。る。に。就。て。思。へ。ど。龍。伯。の。説。も。古。傳。あり。し。事。り。て。寓。言。に。非。ず。然。れ。ど。此。を。今。し。要。する。事。小。は。り。大。秦。中。秦。も。非。ざ。れ。ぬ。由。あ。ら。む。時。ふ。ま。も。論。ふ。べ。し。は。り。大。秦。中。秦。長。翟。れ。や。れ。傳。説。を。殊。り。叶。は。ぬ。按。ふ。り。此。を。今。も。謂。ゆる。南。阿。賣。利。加。の。分。内。小。巴。太。基。羅。須。と。て。長。人。の。國。何。る。由。あ。れ。は。其。傳。説。を。訛。れる。も。有。る。は。し。此。謂。ゆる。巴。太。基。羅。須。の。事。を。荒。井。君。美。娘。し。れ。采。覧。異。言。り。其。見。聞。及。ば。れ。し。長。人。の。傳。説。を。集。め。て。其。所。見。を。述。ら。れ。山。村。昌。永。が。此。書。に。増。記。り。西。洋。書。を。數。部。引。き。て。精。く。載。せ。り。ま。古。微。書。の。河。圖。玉。版。所。も。種。々。の。書。よ。り。長。人。の。事。実。を。拾。ひ。て。論。へ。る。説。等。あり。就。て。見。る。べ。し。儲。ま。り。海。内。北。經。り。大。人。之。市。在。海。中。と。云。亦。字。大。荒。東。經。小。有。大。人。之。市。名。曰。大。人。之。堂。郭。注。亦。山。名。形。狀。如。堂。室。正。有。一。大。人。時。集。會。其。上。作。市。肆。也。

君子國を大荒東經ふ。有東口之山。有君子之國。其人衣冠帶劍。郭注了。亦使虎豹好謙讓也。と云。畢沅曰。淮南子云。東方有君子之國。高誘注云。東方。木德仁。故有君子之國。說文云。東夷。从大。大人也。夷俗。仁。仁者。壽。有君子不死之國。孔子曰。道不行。欲之。九夷。乘桴浮于海。彼國より東口之山と指する方位字按ずる。肥前有以也。彼國より東口之山と指する方位字按ずる。肥前肥後の西面より。筑前筑後。豊前豊後の邊まで城云ごと聞也。然れど此を大概に議ふこそ有ま。實は深く拘を依る。肥前肥事小非交。然るは大人國。君子國を二於小別て稱はま。淮南子を始め諸書字參攷を依る。實を一國を二名を稱せ依る。同じ筑紫の域内を云ふこと著明なり。然れど其を前此筑紫に都し給へる間の事にて。山海經の成する當昔まで。然有りし故。右に如く記せしあり。然れを神武天

皇以後。大人國。君子國と云ふ。都て。然らば大人之國と皇国域内を指んこと云ふも更あり。毛。君子之國をも稱せる由來は如何と云む。また大人を皇國小を。人世と成ても。九尺一丈計ある人多く。脛の長の七握八拳。有るも有らば。況て神世。大人に多あり。事おし量る。ほし。衣冠帶劍して。讓を好し。争ふ事なく。嚴然として君子の風なり。皇御孫命に都し給へる國内。あま。然有しこと疑ふ。然れど此はもと皇國に自稱小非交。彼より稱せる號なる。其由來を尋ね。彼國の古代。君王大人あり。皆皇國に神眞の。渡り給へ依る。依故。其君師大人の本國より義をもて號けし者なり。其

天地人此三皇也。更代して次ある六皇及び太昊氏、女媧氏、
少昊の皇国よて出たる由を既して春秋命歴序考も云へれ
ど、豈此皇等のみあらむや。神農、黃帝、少昊、顓頊、帝嘗れどの
聖人、うちも皆記が皇国より出て、彼の君師と為れること
三五本國考論、儲其君子國と云、依稱を件に山海經の外
ふを見て知べし。鳳凰の至れる事、記せ依所り。出
於東方君子之國、云く也見え。許慎が説文、京房が易傳、あど
取れる物なり。然も有らば、本淮南子地形訓、東方有君子之
國、也、有依高誘注、小、東方、木德仁、故有君子之國、其人衣冠帶
劍、使二文虎也、云云。遠吉が按注、按説文解字、曰、東夷從
之、國、即与此解同、と云へる。大、大人也、夷俗、仁、仁者、壽、有君子不死
天性、柔順、易、以、道、御、至、有君子不死之國、焉、云くと有り。然て
本文の諸本、よた、二、大虎と有依、後漢書の注、そ
の餘、此書りも、此文を引くは、二文虎とあり。大抵、山海

經の成れる當昔、按ふ。彼土の海外、東、小、衣冠帶劍して、
禮讓ある國を、皇國を除きて、有ること無し。是を以て、皇朝に
古き學者、うち、三善、清行朝臣、此意見封事、れど、其餘の紀文
ふも、此君子國と云ふを、皇國の事と知し。彼、國人、ま、直情
ゆるは、後までも、然稱せり。其、續日本紀、大、宝二年、
を、見る、聞、海東、有、大、倭、國、謂、之、君子國、人民、豐樂、禮義、敦行、今
看、使人、儀容、豈、不信、乎、云、依、事、あり、あ、れ、彼、國、に、常、人、の、直
情、ゆる、が、直、言、せる、ある、を、中、に、官、途、の、族、ま、い、學者、等、あ
ど、を、強、て、彼、國人、を、甚、く、劣、れ、る、趣、を、曲、言、して、書、載、する、習
を、し、信、此、事、の、學者、れ、彼、土、に、心、引、く、倫、を、却、り、て、其、曲、言
を、思、ふ、め、る。抑、君子、也、稱、せ、依、本、義、を、君、は、君、王、に、義、子、を
丈夫の通稱、して、大夫を、夫子と稱、す、依、子、も、同、し。大夫を、夫

子と稱せる事也。古書大抵志の多中。左傳昭公七年九月
此下。孔子を夫子と稱せる事。亦依孔疏。身爲大夫。乃稱
夫子。此時仲尼未仕。不得稱爲夫子。以未仕之時。爲仕後之語。
是丘明意。尊之而失事實。陳恒未死。言謚。亦此類也。或有以て
知言。然れ。然れ。師長を夫子と稱する。是より轉用せる語。
あり。但し。師長を夫子と稱する。是より轉用せる語。
師長を夫子と稱する。是より轉用せる語。
凡師長ら。皆ひ居る。傍痛き事。此を序れ。む。驚る
の論。ふ。ちて。君子とは。も。君王を稱する。語。亦依故。民小
對し。衆庶。對し。小人。對し。云。依。こ。多。其。易の大
象。此。文。ま。繫辭傳。あ。と。君子と稱せる。條。を見て。知。禮
記。玉藻の鄭注。君子。は。大夫士也。と云。亦。れ。也。大夫

士。小稱。は。る。を。稍。末。て。此。よ。て。轉。少。て。後。り。は。賢。き。淑。人。を
云。ふ。稱。は。爲。れ。也。其。を。論。語。小。孔子の君子と稱せ。依。條。々
十。七。八。九。王。公。侯。族。に。當。る。を。其。二。三。を。賢。者。小。云。る。也。孟
子。子。至。也。其。方。小。專。と。云。ふ。言。を。爲。る。を。以。て。知。言。し。漢
來。唐。宋。ま。で。此。儒。者。の。注。疏。ど。も。然。依。淑。人。を。君子と稱。れ
る。事。の。本。義。を。説。得。る。解。を。見。ぬ。故。是。を。以。て。煩。し。き。所。爲
は。有。れ。と。經。書。及。び。諸。子。に。君子を稱する。句。字。摘。み。章。字
探。求。て。加。く。を。定。め。近。く。荀。子。王。制。篇。に。天。地。生。子。君。子。君
子。理。天。地。不。利。禮。儀。無。統。上。無。君。師。下。無。父。母。云。云。依。を
子。則。天。地。不。利。禮。儀。無。統。上。無。君。師。下。無。父。母。云。云。依。を
始。め。君。王。を。云。へ。る。と。甚。多。く。賢。人。を。稱。せ。る。も。亦。計。ふ。る。ま
は。暇。あ。ら。ば。猶。別。了。著。り。孔子。聖。説。考。に。云。ふ。を。俟。べ。し。ま
は。大人。國。と。云。ふ。依。義。を。皇。國。よ。て。渡。り。給。へ。る。神。聖。と。ち。緯
書。と。も。小。伏羲。氏。九。尺。有。一。寸。神。農。氏。八。尺。有。七。寸。黃。帝。氏。身

逾九尺タケヒクれや有ルおとく。彼國人よマも文高タチのマし故リ。其國
人どちの文短タケヒク文小合せて稱せるが本マめて。其徳小も叶カナず
て稱せしと聞也。彼國は古尺を我が曲尺の七寸五分に當
るべし。然まはこそ是まは小人に對し。民庶に對して。君師と
依人を稱すれ。其を易の文言傳小。夫大人者。與天地合其徳。
與日月合其明。與四時合其序。與鬼神合其吉凶。先天而弗
違。後天而奉天時。天且弗違。而況於人乎。況於鬼神乎と見え。
荀子解弊篇。明參日月。大滿ハ極。夫是之謂大人とあるも
是義あり。まは孔子家語。今の文言傳と同文にして。大人
の二字は聖人と。周易小。利見大人也。云依語の許多何依を
乾鑿度小。孔子曰。易有君人五號也。と云へる語中小。大人者

聖人之在位者也と見え。孟子離婁篇に趙注す。大人謂君也
とも有るを。相發して辨ふ也。小人と云ふは君子對して
元を民庶の事あるが。君王
を自カらるる威儀あり。礼讓ありて正しきを。民庶をそれ
小反カる行ある故。まは轉じて。揔て其行いの好らぬ
者なむ。大人君子對して。博く小人と云ふ事とを成れり。
大人君子はもと君王の事な依字。博く賢人子云ふも是
同じ。そを譬へば。坊舎に主アる貴人の僧形あるな。坊主を
云ふより轉じて。今世子曰頭なる人を。揔て坊主と云ふ
を。頭カ髪を有。あがら。曰頭なる者此為べき職を。然れど今
勤むるをも。坊主を名くる類ひカよく似たり。然れど今
此本文す。大人君子と。國名を二カ別とれど。唯一域小二名
を稱せる者なること。君子を大人とも稱し。大人はもと
君王の事な依を。思ひ合せて知カし。斯て其大人國と云ふ
文小。爲カ人大坐而削船と云ひ。君子國を云ふ文。使二大虎

在^リ旁^ニと有^ルは。此^レ經^ノの古^ク圖^ニ小^シ。志^スの畫^ヲまて有^ルなる由^ヲ也^ニ。其^ノ畢^ヲ元^ガが校^正よ云^ハる如^ク。凡^テ是^レ經^ノ南山[・]西山[・]北^山・東^山・中山^ノの五^篇此^レみ。實^ニ小^伯鳥^此書^紀れるが。海^外以下^ニも本^經了^附りて傳^子し。海^外山^川人^物等^ノの圖^此有^ルなるは。周^代の人^ノ。そ^レ此^レ圖^ノの古^説を集^記せし。詞^書あるを。後^ノ其^ノ圖^此失^せて。文^書此^レみ存^在るあり。故^ニ其^ノ意^ヲを得^て見^ざれど。解^し得^がさき文^{ども}も多^う也^ニ。今^ノ二^文も。即^チ其^ノ詞^書あり。坐^而削^船と^ス。其^ノ古^國。大^人の依^狀を。示^せむと爲^て画^さり。と聞^え使^ハ二^大虎^を画^さる由^{あり}。次^ノの文^ハ。ちて和^漢の古^人。此^レ君子^も是^レ不^准ふべき事^{ども}も有^リ。ちて和^漢の古^人。此^レ君子^國。皇^國の事^と爲^る依^字。井^澤長^秀が論^小。我^ガ國^みて。虎^を使^ふ事^れく。薰^華艸^も無^れど。皇^國の事^れら。又^と言^ふれ也^ニ。此^レを頑^{ある}説^形也^ニ。其^レを爲^人大^也云^ハ。衣^冠帶^劍。好^テ讓^不争^と有^るは。竝^て此^レ風^小て。虎^を使^ふと有^るは。竝^て此^レ風^を

謂^ハふ^レ非^也。是^レを以^て大^荒東^經小^也。君^子之^國。其^レ人^衣冠^帶劍^と此^レみ有^りて。餘^事字^記さば。又^後小^{こそ}然^る事^{あり}也^ニ。神^世の多^の依^神等^此中^小。韓^國より虎^を生^捕て來^て。畜^ハハ馴^し使^ハ給^へる事^の有^むも何^り疑^はむ。彼^所此^レ僊^人等^小も。然^る倫^多加^れた。神^世了^然る事^れしと云^へらば。騰^古臣^也也^ニ。巴^提便^レ虎^を手^捕りして。舌^を抜^{きて}踏^殺し。豐^臣大^臣の時^不。韓^國より生^捕て來^{れる}虎^の。當^時此^レ益^荒男^ち子^見て恐^りる事^の記^録ども。まゝ薰^華艸^{あり}し也^ニ。言^ふれど。薰^は董^レ誤^字也^ニ。木^槿あると著^く。此^レは山^も里^も不^も。叢^生る物^れる也^ニ。薰^の誤^りる由^也。郭^注小^薰或^作董^と見^え。廣^注子^爾雅^椴木^槿木^槿逸^書云^ハ。仲^夏之^月。木^槿榮^詩云^ハ。顏^如舜^華。即^董也^ニ。本^草謂^之。朝^開暮^落。花^薰爲^董無^疑と云^ハ。へり。但^し此^レを其^レ苗^の朝^も生^{して}夕^も枯^る

由小た非ば其花の朝開きて暮に落るを云へるあり。○後了説郭子出せる玄中記を見れむ君子之國地方千里多木槿花とありまよ張華が博物志も君子國人衣冠帶劍使兩虎民衣野絲好禮讓不爭土千里多薰華之草好讓故為君子國也。○垂く在其北各有兩首は郭注小垂音虹とも見えり。虹蠅螈也とも有れむ虹を司る神を謂ふと聞也。○朝陽之谷神曰天吳是為水伯云くは。大荒東經に有夏州之國有蓋余之國有神人八首人面虎身十尾名曰天吳と有了。夏州之國蓋余之國とも。筑紫内の小地名とも聞ゆれども詳あらざ。天吳の居所を朝陽之谷と云ひ有兩水間と云るを按ふ。豊後國佐加關と伊豫國三崎を此間ある洋を謂ふ。其を此邊はも南小大洋あり。北に内海あり。兩水小間れ

依所あれむ。後了生田國秀志を見て云々らくは朝陽之谷を即湯谷とて朝字の添はりしは日月所出とも云る谷ある故は待らじ。其在兩水間也有るも此辺も也よ。内海あり。其谷を中ふして見らむ。小た兩水間と云むも難れ。依べくや。但し此文の続き青邱國云々を隔て黑齒國の下あり。湯谷と重複せれど其は豈これのみならず。此經凡て重複の多りれむ。か小のく。小朝陽之谷。即湯谷ありと見らむ。方總は待らじ。と云り。第五條湯谷の所と合せ考ふべし。

四

青邱國在其北。其狐四足九尾。帝命豎亥步自東極至于西極。五億十選九千八百步。豎亥右手把算。左手指青邱北。

青邱國とは東方朔が十洲記に長州一名青邱在南海辰巳之地。上饒山川又多。大樹乃有二千圍者。一洲之上。專是林木。故一名青邱。又有仙草靈藥。甘液。玉英。靡所不有。又有風山。山

恒震聲有紫府宮。天真仙女遊於此地。と有る長州是あり。但し此文。南海也有依也。東南とありし東字は落多依れり。其を何を以て知ると言む。小廣黃帝本行記。東到青丘。見紫府先生。登於風山。受三皇內文。天文大字云く。呂氏春秋。禹東至鳥谷青邱之郷。まゝ清靈真人傳ふ。乃遊行天下。東到青丘。遇谷希子云く。あや有りて。一向東方と指さるを。辰巳之地也云ふ。小相合せて辨ふべし。即ち此徐州の東南海外の辰巳に當る由あり。あほ青丘を東方海外と爲る。諸書は傳説多りれど。益を引出さば。然らば其青邱とは何處あると言ふ。大人君子は國の北に在る由を述む。筑紫の北面。火國豐國を本として。四國木國の西北迄を廣く指さ

すと聞ゆ。そは長州と云ふ號も由ありて聞え。そは青邱といふ名を。正す大樹は繁茂せる故に名あるを。火國よ東南。木國小至依まで。神世の布衣は。殊に大樹は茂れる。小思ひ合され。於十州記。其域内小。有風山。山恒震聲と有依も。伊豫國の風早郡あり。烈風ある所あり。相符合て聞ゆれむ。其大樹どもの事。第九條の末に益く引出るを。見るべし。まゝ今引ふ依書等。紫府宮。紫府先生。谷希子。まゝ三皇內文といふ物の事れども。本編。赤縣太古傳。三皇紀。委く云ふを見るべし。其狐四足九尾也。大荒東經。青邱之國。有狐九尾と出づ。郭注。小。大平則出而爲瑞也。然る小海内南山經。も青邱之山。其陽多玉。其陰多青雘。有獸焉。其狀如狐而九尾。其音如

嬰兒能食人。食者不盡。とあるは別れて。乃本文此青邱也云
ふ名を海内小移せざる也。其を本文此を。眞の九尾狐ある
哉。南山經の狐は。狐子如。九尾狐の。九尾狐の。住免故。
姑狐と稱せ依あらむ。凡て彼国此地名。此山此名のみれ
ら。海外の地名を移せる名いと多
し。其を然る地名の
出る処くも云べし。はて帝命豎亥云くは。山海經を更る也。
他に古書も。斯の如き事。打任せて帝と稱せるは。多
く天皇太帝城指せり。然る小此條に劉歆が比較小を。一曰。
禹令豎亥云く也有也。淮南子も禹也有也。城。黃帝本行記
小は。乃黃帝此事と爲る也。今何を是とも思ひ定免難し。此
亦後生の考
按字俟扱べし。はて其謂ゆる東極也。天皇太帝の世字始め

日給ふ時。大地の四正小立給ひし。謂ゆる四極の第一也。
岳瀆名山記。東岳廣桑山。在東海中。青帝所都と有る域を
云ひて。此を神典。伊邪那岐大神の自礙嶋小。天柱國柱と
立給ひし也有る。御矛化まる山即是也。淮南子地形訓
之山。曰。開明之門。と有る高誘注。日之所出也。故曰。東極
開明。と云へるも此山あり。れを本編に云を見るべし。此山今
現小淡路國に屬す。其西北隅小在るを。此所立ちて西
に向すは。青邱。依阿波。伊豫。豐前。筑前。肥前。依也。皆其左手
尔指也。斯下文子謂ゆる湯谷也。此山より正西に當り
て程近き内海に在り。然まば此内海の所小豎亥を居しめ
て。四方の極より極小至る。里程字推歩せし免る由也。

歩を畢沅が注ふ。鄭君注尚書大傳云。歩推也。高誘注淮南子云。善行人誤矣。と云。依を理する言なり。然れど推歩の歩をもせ歩行して算せり。出、依語あること也。已別。小考へあれど。此もを漏し於。右手把筭。左手指青邱北。とは。乃豎亥の圖象に有状を謂り。諸本小筭を算し誤れり。今は畢沅が校本小據して改め。筭は説文。長六寸。計歷數者。从竹弄。言常弄乃不誤也とあり。歷象測量の事。まゝ我が是。よて其端倪を知るべし。此事委く。東極より起原せること。三層由來記す説に依り見るべし。

黑齒國在其北。爲人黑齒。食稻。啖蛇。一赤一青。在其旁。下有湯谷。十日所浴。湯谷上有扶桑。有黑齒北。居水中。有大木。九日居下枝。一日居上枝。雨師妾在其北。其爲人黑。兩手各操

一蛇。左耳有青蛇。右耳有赤蛇。

大荒東經。有黑齒之國。帝俊生黑齒。郭注。齒如漆也。聖人神育多。有殊類異狀之人。諸言生者。多謂其苗裔。未必是親所產。姜姓黍食使。四鳥也。有。其北云。くは。青邱北。北。豎亥の筭字把りて西。了向ひ。左手小青邱を指し依圖ありて。其北小此國字畫之。其所。黑齒れる人字畫きて。其傍小二蛇を畫添ふ依が。一を赤蛇。一は青蛇ある由れり。黑齒之國とは。乃黑齒の生國と謂ふが如し。帝俊と云。帝嚳高辛氏の一名なり。前小は郭注。俊亦舜字假借音也。と云。説小依りて。虞舜此事と爲し依を悪う。其を路史高辛紀。帝王世紀を引きて。帝嚳生而神異。自言其名曰俊。山海經作俊。言帝俊處甚多。皆謂嚳。郭注皆以

為舜讀舜俊音相近失所考矣と云ひ畢沅が山海經に注ま
し徐文靖が竹書紀年の統箋も路史と同説りて共然る
事あり。ちて黒齒也。郭注に齒如漆也。聖人神化無方故其所
降育多有殊類異狀之人と云る小依れむ其國人みれ黒齒
ありと謂ふは非也。此一人のみ生あら小其齒の黒也
故尔。是名を負しを聞えあり。但し郭注に諸言生者多謂其
此先輩ら多く此説り依れむと。苗裔は必是親産と云るを彼
此を帝嘗の親産あること疑ふし。ちて本文小為人黒齒食
稻啖蛇と有る小就て臆説あり其は何也。ちむ書名字忘れ
あり。彼國籍了食稻者齒白食禾者齒黒と云る語に有れむ。
此人稻は食了也齒の黒也意う。はく若くも好みて蛇を食
ひし故り。蛇毒を解せむと。鐵醬もて常小齒を染て在りし

も亦知傍うらむ。然れど上は郭注に聖人神化無方云々と
云るは抑む予が今の説はみれ強言れ
也。何れ小依るとも其國あべて其為人ありと謂ふるを非
交帝俊の親産せる一人の黒齒ありし事を論ひあくある
下は引く呂氏春秋黒齒之國と有る所は高誘注に東方其
人齒黒因曰黒齒之國と云るは山海經の文をよく察さる
誤り。ちて下有湯谷。湯谷上有扶桑とは黒齒國に圖より下
小湯谷に圖を畫き其湯谷の上は扶桑國を畫りる由ある
が。然のみ言ひては黒齒に湯谷の上小在也。異名同處の
如く聞ゆる故り。はく在黑齒北居水中在大木と云ひて共
小湯谷に上小有まると。其州の各別ある由を示せるなり。
此は古人の文辭に丁寧深切ある所あり。心を潜めて視るべし。故是方位説に據り。呂氏春
秋求人篇小禹東至榑木之地。日出九津。青羗之野。鳥谷青丘

之郷。黑齒之國。

高誘注。搏木、大木也。津、崖也。淮南子曰。日出暘谷。青羌、東方之野也。東方、其人齒黑。因曰黑齒之

國。○增注。搏木、即扶木也。

と有依字照し合て其所在を索むる小。先謂也

る青邱也。既小云ふおとく。筑紫の北面なる豊國を本と志

て。其東西の國を指こを疑ひ無きた。此豊國北北了て。黑

齒國小當依一渚を索むる小。豊後北國崎の東郡。伊波比洋

の西南よ。今現了姫嶋と稱ま依嶋あて。此を神典了二柱神

己了大八嶋國を次く小生給ひ。然後小ま六嶋を生給ひ

し中小女嶋亦名謂天一根と有る嶋あり。黑齒之國を疑れ

く是あて。前了是扶桑國考を草稿せし時よ。此國の所在を

め難しと云る也。今思へむ拙り支。其右呂氏の文を更

め難しと云る也。今思へむ拙り支。其右呂氏の文を更

あり。淮南子脩務訓小。堯西教沃民。東至黑齒。北撫幽都。南道

交趾。と有る高誘注了。沃民、西方之國。黑齒、東方之國云くと

有よて。我が東方あること著し。然るを郭注よ。魏志の東夷

傳を引きて。倭國、東四千里有。裸國、裸國、東南有。黑齒、國。船行

一年可至也。と云へれど。本文了。扶桑有。黑齒北。と云ひ。諸書

は。扶桑は彼國の東海外に在りて。日の出る所也云へるよも

合されむ。此は荒唐至。其は此。姫嶋北下小。豊前國企救郡小

極の妄誕れりし。屬る速靱の湍門也。此を神典了。伊邪那岐大神。豫美都

國に穢惡を濯除ひ給ふ所了。乃往見粟門及速吸名門。然此

二門潮既太急。故還向於橘之小門而拂濯也。と有る速吸門

小て。是疑あく湯谷也了。然るを其所在。本文小。黑齒下。在湯

谷と云る小。符合了。但し神典れる速吸門。ま。女島

詳了考へ得られざしを。速靱は湍門や。て速吸門ある

事。小倉の殿人。西田直養といふ人。識了考へて。速吸門考

少い物物を書き、女島の事を、豊後此并築の殿人、小串重威と云ふ人よく考へて、姫島考と云ふ物を記せり、其二説とも、古史傳まゝ、本編不出せれ、はて呂氏春秋、日出九津む、今其定説を此み出せるあり、はて呂氏春秋、日出九津と云ふは、即本文の湯谷なり、此谷をしも、本編三皇紀及び三五本國考小言ふ如く、黃帝書小謂、伊谷神不死、玄牝之門、天地之根、老子此謂也、百谷王、列子小謂也、大壑無底之谷、れるが、はて此字甘淵とも稱ふ、そは大荒南經、東南海之外、甘水之間、有義和之國、有女子、名曰義和、爲帝俊之妻、生十日、常浴日于甘淵、と有る是なり、此文、今此諸本、誤字は引、依文と、校合して引、ぬるなり、義和之國也、は、義和の本國也、云意の稱、あ依が、まゝ、此字少昊之國とも謂ふ、そは大荒東經、東海

之外、大壑、少昊之國、少昊、孺、帝顓頊、于此棄其琴瑟、有甘山者、甘水出焉、生甘淵、と有る是ありて、此少昊の生國と云ふが如し、少昊を、謂、也、依、五帝の第四、はて、黃帝此子あり、黃帝乃此、國の産あるが故、少昊まゝ、此、國にて生れしあり、顓頊を、黃帝の曾孫、はて、五帝の第五、あるが、此、大、西、蜀の地、は生れしと、此、國に在し、は、故、ある事、なり、帝俊も、黃帝の曾孫、はて、唐堯の養父、あるが、此、國にて生れ、はて、大荒南經の文、義和生十日、と有るを、郭注小言、生十子、各以日名名之、故言生十日、數十也、と云、依は然る言、はて、日名とは、甲乙丙丁等、は十干を謂ふ、此をもと、太昊氏の日、數、は名、小用ひむ料、小、作、か、給ひし物、あるを、義和は生、はて、十子の名、命、する由、あり、そは大荒西經、帝俊妻常羲、生、月、十、有、二、此、始、浴、之、とある注、義和浴、日、同、と云ひ、海內經、

共工生后土生噎嗚噎嗚生歲十有二十有る注云生常
十二子皆以歲名名之故云然と云へるも皆同じ例あり。
浴日于甘淵とは十干を以て名けし子等を常ふその間を
る甘淵を浴せしめて。育養せるを謂ふ。乃本文云。黑齒下有
湯谷。十日所浴也。有るを相照し攷ふまは。甘淵と謂ふ。乃
湯谷の別名。義和之國と云ふ。即黑齒之國。まゝ少昊之國
の依也。甚明小知らまゝ。然れを此は一渚にして。三名
を稱せるあり。然れど其みよ彼よと稱せし名もて。實を神
典を謂也。依女嶋あること。上云ふが如し。此國はかく三
は。譬へむ孰の國ははれ。同國の産ある人三人あるを。其國
を云々まきま。其麻呂が國とも。其子國とも。何彦が國とも
云。こと有るが如く。あつても黒齒が生國。義和の
本國。少昊の生國と謂ふ。同じと知るべし。抑是嶋を姫

嶋としも謂ふ由を。神典より出る昔語。新羅國にて。阿具
沼ちふ沼の邊。一賤女晝寢し。依小。日耀虹の如く。それ
會を指さる。一賤夫その状字異しと思ひて。恒小其女の
行ひを伺ふ。此女それ時よて妊みて。赤玉を依む生る。
三五本國考小引する諸書。少昊の母女節の大星虹。如
く下れる。夢接して少昊を娠み。顛頊此母女。樞此瑤光。虹
此如く其宮。入れ依り感じて。顛頊妊み。みしと有るも。星
と云へるを耀れる故の文。よて。實を此賤女の會門を指さる。
日耀。同く是を謂ふ。天根玄牡。此氣勢あり。り。其を彼
第七條の注。陽谷咸池。此名義を説く所。謂ふを見べし。彼
賤夫それ玉を乞取めて。恒を裏みて。腰を著り依を。後よ由
何とて。其國主の子。小幣と爲りて。然る小國主の子。それ玉
を床邊に置し。うは。即美麗を嬢子。小化かぬ。茲を妻と爲し

て在りる小。其嬢子常々種々此珍物を設りて。其夫を進めしりば夫の心奢りて。妻を詈れば。吾を汝の妻と爲べき女小非らば。吾祖此國を行むと云ひて。竊びて小船を乗りて。逃遁れて。皇國を來れるが。比賣語曾神と爲れるよし見え。大の事を古事記應神天皇段と日本紀に垂仁天皇紀の。一書とに載られざるが。其傳の趣異なる事ども有り。合せ見て其異を。攝津國風土記と。日本紀を併せ考ふゆゑ。其始免て著る處を。豐國此國前郡。伊波比比比賣嶋ありと有る。此乃二柱神の生給へる女嶋。亦名は天一根とある嶋小て。此を比賣嶋と謂ふ也。是比賣神の來り住める故なりとふ説ありて。誠不然る事とは思ふ物なり。此を人世と成り

て。後此故事あるを想ふ。是より古く義和此住める由縁小ありて。神せよとして去り號け來れるも亦知れりらば。其は義和と云ふを。彼國に傳へし漢名小こそ有れ。實に皇國の女神小し有れば。此方にて稱せる名の別は有り。む事云ふも更あり。此小串重威が姫嶋考小。此を彼比賣神の謂をも思ふべし。其夫遁れて來り住める嶋あり。今も赤水明神とて此女神を祭まじ。其神體を木像にして。婦人此筆を持ち。齒を染むる容れり。古く赤水明神と白く由る。其社の在る岩下よ也。赤錆の鏡醬水がれ出て。手を拍てば響小應じて。逆る故り。拍子水や名がけ。土人を明神此靈水なりと言ふを記せ也。此を黒齒國とも謂へる故事小。能くも符へる實蹟あり

正あし。まゝ姫島考了。俗説に此比賣神といふを眞野の長
神の聖水ありと云ふ者れ女玉世媛の事として彼拍子水成明
おくる形は造りてして鍊漿おけ石楊子柙れと云事をも
設け出て名所の證せし物なり然るも齒を染る事を我
が國中古より此風儀あれども上代には然る事れは
後人の所為あること疑あしと記せぬ事非ぬと前を諾ひ
ふれど今思へば眞野長者が女は事非ぬと前を諾ひ
と名りし此聖水の固より有る由縁はあつて義和ま
と帝俊れ生める子も齒を染めて在りし故あるう又或は
彼黒齒も帝俊れ子あり凡常の戎人れ種族あらぬ実を
大國主神の遠くらぬ御裔れむ固より神く志く好みて
齒を染りむ因縁より然る聖水の沸けし神典に此嶋
出て今に至る実迹あるも知れうらけし神典に此嶋
の亦名を天一根と謂へ依名義を壹岐嶋れ亦名を天一柱
と有るも海中に離れて一ある嶋れる故の名あはば天一
根と云ふも然る義の名もややも思ふと此嶋大塵嶋谷の

傍に在る嶋を依故了やがて此字國名とて大塵少昊之
國とも人皇氏まゝ義和れ子等を出于嶋谷也も云依字亦
大れ玄牝天地根れるう想ひ合されむ二柱御祖神れ此
幽契をもて名り給へ依も亦知れうらけ。其を凡て國々の
考ふるも其本名と爲るが却りて後うて亦名といふ名
ぞ二柱神の當者号り給へる名あると思ふ由を既古史
傳了論へれを今更抑かの比賣語曾神れ吾祖の國了行む
とて此嶋り來れる事を師説了皇國を日大御神れ御生ま
せ依本國あるが故也。と言れしは然依説れど尚按ふ
小。天日れ御國也。も此よと判りし物ある小。況てそを所
治看れ大御神。これ近き間あり橋之小門にて生坐せる故

小。祖國オヤクニ也。は云、依りて。其ミヤ祖ミヤ本國と謂ふが如し。此コト本編編了了委委く記せるが其概畧ハヤスロト也。此コト速吸門ハヤスロトある湯谷カミ上上。姫嶋ヒメジマなる黒齒クシ北北有有在在りて。水中小居オホセトトヨアキワシ以以言言へば。扶桑國スベイロとは。長門周防オホセトトヨアキワシ續ツギりる。大倭豊秋津嶋スベイロ字スベイロ總稱スベイロし名名るる也也。著著くはくは有有大木大木と云、依依る。即即謂謂也也。依依扶桑木扶桑木形形依依るる也也。言言ふも更更なり。大倭豊秋津島大倭豊秋津島を二柱二柱神神の生生ませる国国の多多う依依中中小小も。国国は長子長子ある故故りや有有む。何何どし島島は勝勝れる大洲大洲りて。西西沈沈長門長門の豊浦豊浦郡郡より東東を陸奥陸奥津津輕輕南部南部の端端に至至るまで。一連一連は長大長大なり成成し国国あること。既既り古史古史傳傳に云云へる如如あり。む。扶桑國扶桑國也也。都都て此此辺辺。但但しそは扶桑大樹扶桑大樹の下枝下枝り九日九日居居上上枝枝小小一日一日居居以以と謂謂ふ事事の由由なり。あく小言小言むを紛紛はしし杞事杞事とも有有れむ。第七條第七條下下小説小説くを俟俟へし。○雨師雨師妾妾

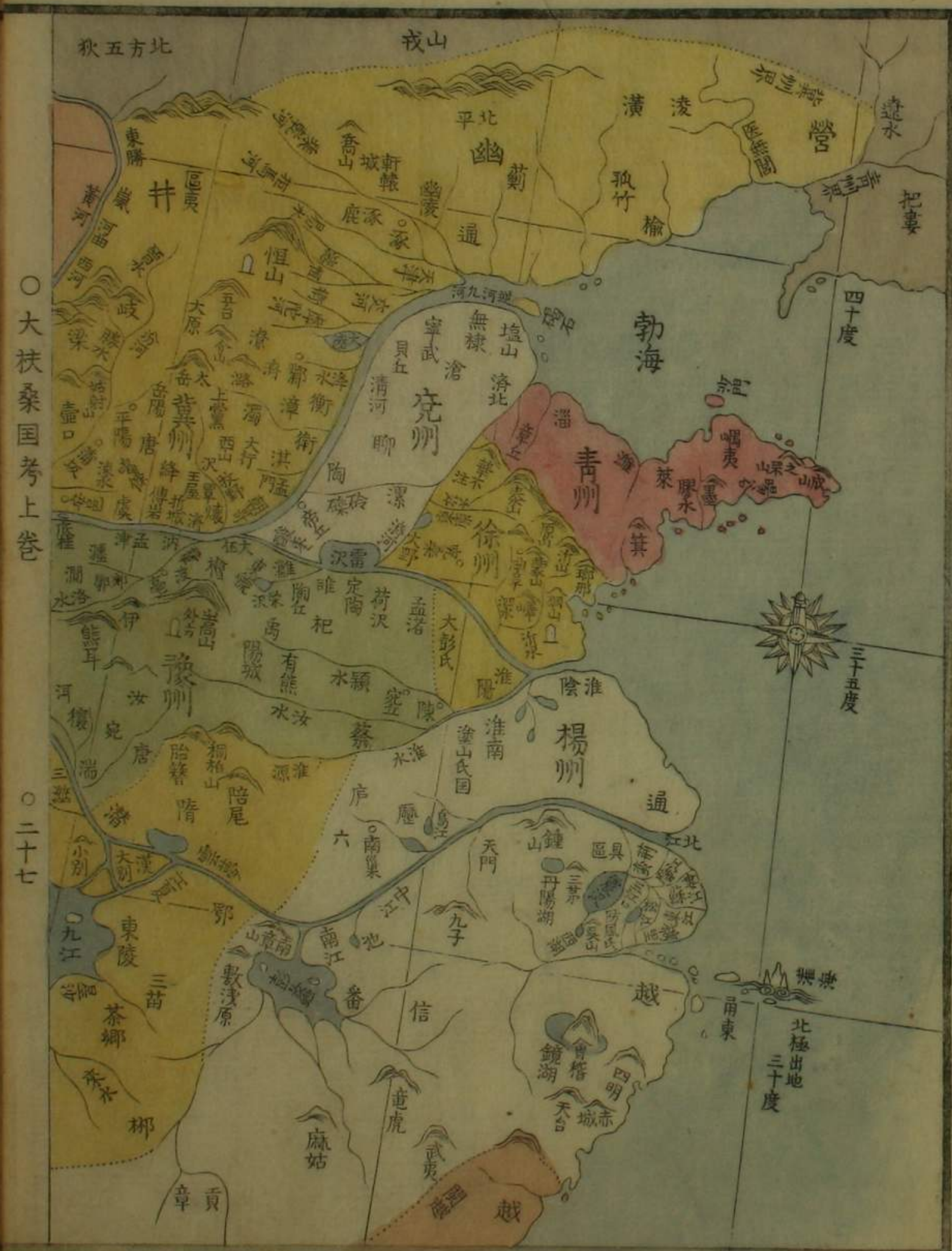
在其北在其北云云くは。郭注郭注了。雨師雨師謂謂屏翳屏翳也也。有有了。初學記初學記に。雨師雨師曰曰屏翳屏翳亦亦曰曰屏號屏號とも云へ了。雨雨を司司る神神の漢名漢名れ了。風俗風俗玄冥玄冥為為雨師雨師と。妾妾云云子子は其女神女神りや有有む。劉歆劉歆が校文校文小も見えり。は爲爲人人黑身黑身人面人面。各操各操一龜一龜とあり。偕偕上上件件奢奢比比之之尸尸。垂垂く。天吳天吳九尾狐九尾狐。この雨師雨師妾妾れを更更なり。山海經山海經中中に。形形を種種れ。此此神物神物どもれ。現形現形せる由由を載載せ依依る。大荒西經大荒西經に。顛頊顛頊令令重重獻獻上天上天。令令黎黎印印下地下地とある所所に郭璞郭璞注注了。古古者者人神人神雜擾雜擾。不可不可放放無無別別。と言言ひ。史記史記の歷書歷書小も。其其世世の事事小。民神民神雜擾雜擾。不可不可放放物物云云く也也有有る如如く。當昔當昔未未顯幽顯幽此此間間分分くしから。交交右右の類類れる神物神物。亦亦人人形形を隱隱さ依依るも有有しあり。列子列子湯問湯問篇篇。夏夏革革が語語る。鯀鯀鵬鵬

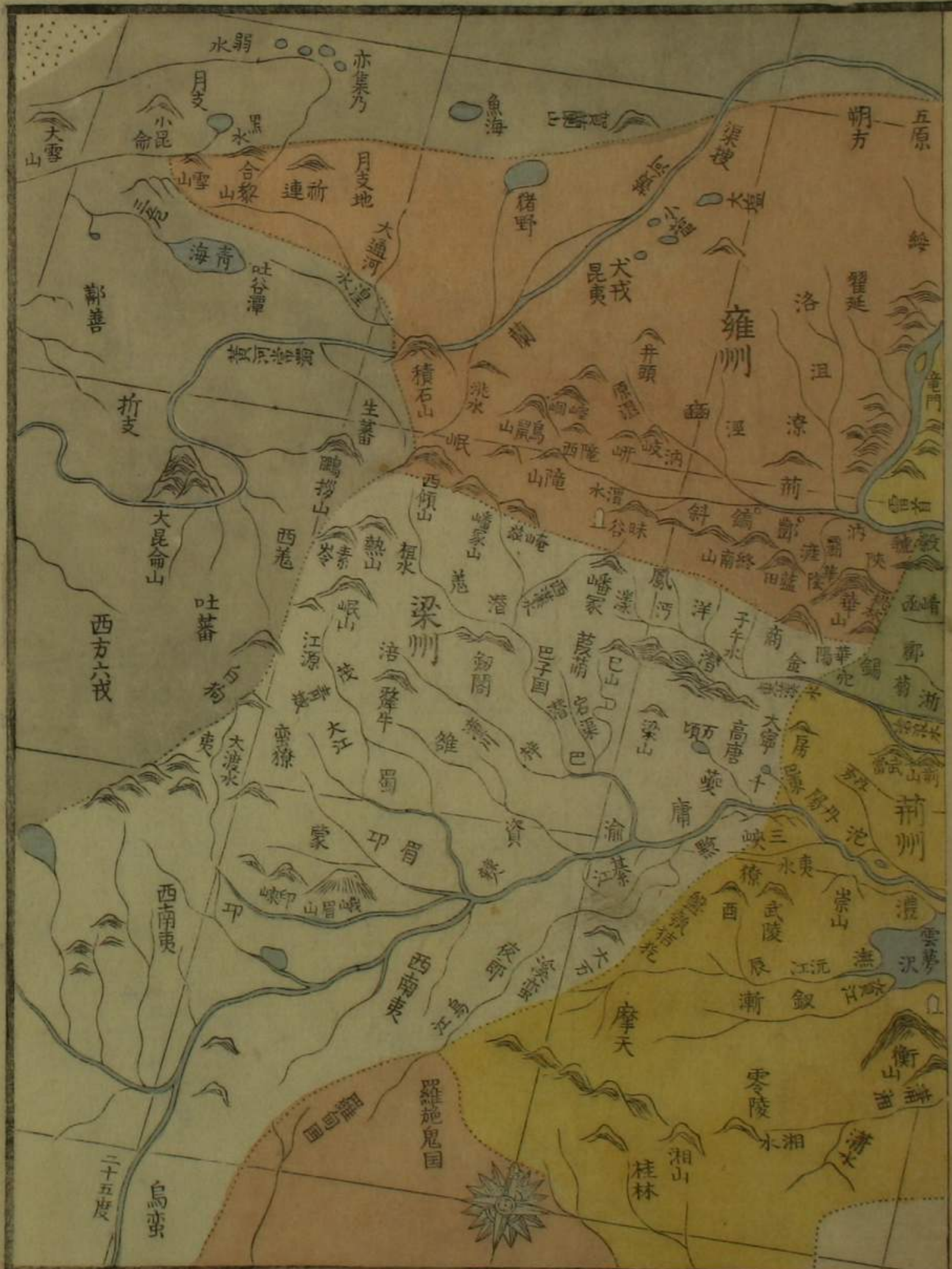
經ふも有毛民之國。依姓食黍使四鳥禹生均國均國生役采。役采生修鞫。修鞫殺綽人。帝念之。潛爲之國。是此毛民と有り。然れば夏禹此末也。玄股。毛民。勞民と合せて三國みあ扶桑北に在。依由あれむ。我が奥蝦夷此嶋を云へるこ也疑あし。毛民の郭注み。今去臨海郡東南二千里有毛民在大海州島上。爲人短小。而躰益有毛如猪。能穴居無衣服云々。や云へる。風俗は似れど。國の所在を。淮南子地形訓。三十六方位違へり。此を非説や爲べし。淮南子地形訓。三十六國の所。自東南至東北方。有大人國。君子國。黑齒民。玄股民。毛民。勞民也。有るを。是經字採て載と依あ也。高誘注。毛民。若矢鏃也。勞民。正理躁擾不定也。と云へり。右條の方位説小據わて。皇國と赤縣州を相接はる様を。度數を合せて縮圖するはと左

此如し。凡て予が著書中小。彼方と此方との方位を論ず。依件くは皆是圖小抄をて索む。但し皇國此圖を長窪玄珠が日本路程全圖より。赤縣朝鮮及び蝦夷等の境界。まは度數の矩は測量所板の万国全圖より。赤縣州の地形及び地名等。玄珠が唐土沿革地圖の禹貢職方圖より。本抄き。明此一統志。まは圖書編など諸書の國說を校し。中朝の國を三國通覽に附圖し。本抄に且い。小皇國より。日本府を置て。取め給ひし。時の古説を。古典小考へ合せ。て。安藤直彦。小令製する大圖あるを。今かく縮圖せし。知より。精くを其大圖を就て見せし。



○大扶桑國考上卷
○二十六





四面經緯ノ線各五度一度ハ
 皇國ノ里法三十里許リニ當ル
 大概曲尺ノ四分ヲ以テ一度ト
 為ス但シ經度ハ地球ノ體ニ倣
 ヘル故ニ南北廣狹アリテ其國ノ
 位置ニ依リ東西ノ里數均シカ
 ラズ實ニ六線ヲ撓メテ地田ニ倣フ
 ベキ事ナレドモ小國ニテハ大差ナ
 ケレバ姑ク直線ヲ用ヒテ製圖
 ノ便ニ從ヘリ見ム人コノ意ヲ得テ
 〇ヲ記セルハ舊都ニハ五表ノ
 目標ナリ。

七 東方句芒鳥身人面乘兩龍。

郭注了。木神也。方面素服。墨子曰。昔秦穆公有明德。上帝使句
 芒賜之壽十九年。と言ハ。禮記月令小孟春之月。其日甲乙。其

帝太皞其神句芒鄭玄云此蒼精之君木官之臣自古以來著德立功者也太皞宓戲氏也句芒少皞氏之子曰重為木官者也淮南此時則訓小東方之極自碣石山過朝鮮貫大
人之國東至日出之次搏木之地青土樹木之野高誘云搏木搏桑皆日所出之地也太皞句芒之所司者方二千里大皞伏羲氏東方木德之帝也句芒木神司地主也
尚書大傳曰東方之極自碣石東至日出搏桑之野大皞句芒
司之鄭玄云有司故上黑齒國之條說遺湯谷扶桑之事故也
復更論はむ小彼文。在黑齒北居水中有大木と云
依之即謂也扶桑也。九日居下枝一日居上枝と有は例
此繪詞也。彼十日と稱せる義和の十子也。一人を上枝に

昇り居し。九人を下枝に昇り居る。圖の由あり。其をまま
大荒東經云。湯谷上有扶木。一日方至。一日方出。皆戴于鳥也
も有依て合せ考ふる小。十子相代り也也。此高木小昇りて。
身を暴サせる圖象なり。此は沐浴也。故實と聞えし也。然るを
義和生す十日とある所也。右の如く十日を十子と説き。於て
九日居下枝一日居上枝と云ふ所なり。傳曰天有十日日之
數十此云九日居下枝一日居上枝大荒東經又云一日方至
一日方出云々とて莊子淮南子を始め諸書を引て。天日の
十箇ある由を證し廣注す。畢沅が注も同説なり。引て。天日の
あり。天子豈眞の十日有らむやも殊小実の日象あらむ。非
戴鳥とは云々も。非人形なり。故にかく云へり。文を
よく心を於て辨べふべ。支あり。但し。かく云はる。日中有鳥
と云へる。曰く。俗説を引出し。人も有らむら。其をはる。日中有鳥
三五本國考の末條に辨べるを見て知べし。其をはる。日中有鳥
南に天文訓云。日出す。湯谷。浴す。咸池。拂り。扶桑。是謂く。晨明。登る

于扶桑爰始將行と有倭陽谷也。即上の大壑。甘淵。湯谷。了て。諸書小。或を陽。まゝ。嶋。形。とも。作。れ。ど。共。此。谷。れ。名。小。用。ひ。し。は。易。の。義。あ。れ。む。三。字。同。音。ふ。て。此。を。本。編。小。委。曲。せ。る。如。く。天。日。れ。始。め。て。分。判。せ。る。谷。あ。倭。由。緒。小。因。り。て。元。易。云。ま。よ。了。建。し。始。ま。倭。故。の。名。あ。り。然。れ。を。海。外。東。經。有。る。湯。谷。の。郭。注。了。谷。中。水。熱。也。と。云。る。を。前。に。お。し。何。ぞ。や。思。は。れ。ど。然。も。有。べ。し。然。て。左。太。冲。が。吳。都。賦。に。經。扶。桑。之。中。林。包。湯。谷。之。滂。沛。と。あ。る。注。に。湯。音。陽。と。云。る。は。正。義。あ。り。然。れ。ど。陽。も。あ。る。阜。子。從。ふ。字。了。て。迂。遠。を。れ。む。實。了。を。湯。湯。と。も。音。易。と。こ。を。注。を。べ。り。れ。謂。也。陰。陽。の。正。字。は。會。易。の。字。を。用。ふ。る。が。正。し。き。こ。と。本。編。了。論。ふ。如。あ。れ。む。り。斯。て。畢。沅。が。校。正。本。に。見。れ。む。虞。書。宅。嶠。夷。曰。湯。谷。說。文。作。湯。史。記。索。隱。云。史。記。旧。本。作。湯。谷。淮。南。子。云。日。出。湯。谷。浴。于。咸。池。按。湯。嶋。嶋。皆。一。也。と。云。へ。る。を。余。と。同。意。の。說。を。は。り。て。日。を。湯。谷。小。出。て。咸。池。小。浴。し。扶。桑。に。拂。ふ。也。云。る。は。

天日此此よ始めて分出せる古説と。彼十日の扶桑湯谷小沐浴せる故事とを合せて。日く小新了る此谷より。出行る趣了章れせる文詞あり。然るを天日はしも其生了始め此生り出る物了非了倭了と。神典の古傳に大地と成るべき物の中より葦がれ了萌騰れ了物あり了。天日了成るべ成れる由あり了。思ひ合せてかくを論ふあり了。迺了年了。何人よや。日月東湧地平圖説といふ物を著して日月共了日了了大東洋中より新了成り了物あり了。神代古説字得て蝦夷地四十度の所あり了。實了は天日及び其大御神。聞了予未了其書を見了。暗了其了。實了は天日及び其大御神。説の妄了察了。後了生了迷了。こも勿れ。實了は天日及び其大御神。此御國よ了出。とは云。倭。う。ら。交。然。れ。ど。上。古。漢。土。了。て。東。と。号。り。し。を。扶。木。の。在。し。地。を。

云い其地在即皇國にて。實も春氣是より發生して。万物を鼓動し。万国を育養はるること。顯然これ日く。此地より出たると云むも。理あり。然れを搏桑暘谷を。天日の出る處と云ふ説のみ。眞れ古傳の遺水る小。十日此説を。別一故事此混淆せる者。故に三五本國考の末條。委く辨明。其意を以て知る。王充論衡。儒者論。且日出扶桑。暮桑柳。天地之際。日月常所出入之處。問曰。歲二月八月。時日出正東。日入正西。可謂日出於扶桑。入於細柳。今夏日長之時。日出於東北。入於西北。冬日短之時。日出於東南。入於西南。冬。與夏日之出入。在於四隅。扶桑細柳。正在何所。論之言猶謂。春秋不謂冬。與夏也。と云。論上。論へる古義を。知ざる論あり。それは夏を東北より出で。冬を東南より出れど。春分秋分。これ東西の正位なれ。此を本とて。東より出れど。春分り出で。西より入ると謂ふ。子細なき事。成るや。儲ま。天文訓。暘谷咸池。二名を稱。此も同所。此異名なり。

其を山海經。湯谷浴以也。有るを。浴咸池と云へる。小て著く。此は謂ゆる對文の格あり。其例を。下小委曲。論ふ如く。扶桑若木。同樹。此異名。乃る。楚辭離騷。飲余馬於咸池。兮。摠余轡乎扶桑。折若木。拂日。と文。類あり。王逸注。浴處也。摠。結也。扶桑。日所拂木也。言我乃往。至東極之野。飲馬於咸池。與日俱浴。以潔己身。結我車轡。於扶桑。以留日行。幸得不老延年。壽高大也。と云。能く。唯。然。若。扶。桑。若。木。を。別。木。の。如。く。説。き。ま。ま。折。取。若。木。以。拂。擊。日。使。之。還。去。也。云。ひ。或。謂。拂。蔽。也。以。若。木。鄣。蔽。日。使。不。得。過。也。と。も。説。き。淮南子。れ。高。誘。注。よ。拂。猶。過。也。と。注。せる。ふ。と。皆。非。なり。此。を。拂。蔽。同。韻。て。實。を。扶。桑。を。折。取。り。て。己。身。の。汚。惡。を。祓。除。する。義。を。成。物。を。や。て。如此考へて。後。沐浴。此。二。字。小。ふ。と。心。留。めて。説。文。を。檢。る。了。沐。濯。髮。也。从。水。木。聲。浴。洒。身。也。从。水。谷。聲。と。此。み。有。て。木。小。作。り。谷。小。作。る。

埤解といふ書了。浴者猶浴乎沂之浴。此言時有鳥浴于水涯也。云へるを用ふ也。居焉與鳥魚游審其四時權節所謂
小春之際種麥刈茅之時藪沢溝洫之慶往々有浴水之鳥村童野老見以爲雨候也。嗚呼先王敬小之明徵諸本邦今日而不繆矣。況其大者庸得不畏敬乎哉。但是此等事眞儒之所用心而以博雜一虹思蒙以爲禽犢書簾之所忽且大笑也。學者所須當查看也。とも云へり。諾ある言なり。以て上代よわかく鳥浴此諺あてし哉思ふ。彼羲和の生める十日此子等。頭小鳥形を戴り依事も。此鳥此浴小效子依古儀の圖象ある。其を鳥は浴して後。加らる交木小栖して翼を伸べ干以物なきは形也。前
た鳥浴字今も雨候と考れむ。頭小鳥形を作り戴き木谷して雨を祈れる図象あらむ。其を大荒東經了黃帝の應龍を使ひて蚩尤を殺せる事を記せる文中。早爲應龍之狀。乃得大雨と有り。其郭注了。今之土龍本此氣應自然冥感非人

所能爲也と云。依子神農氏の祈雨止雨法も思ひ合せて。かた今接へを然る儀。然らば其大壑甘淵。陽谷をまゝ咸池と云ひし義は如何と云ふ。池を初學記了。此谷此事を。曰天池。一曰朝夕池。亦云大壑巨壑。と有る池も。地字と共り女會此義あり。咸を感と通じて。易此澤山咸の咸小同く。交咸の義なり。謂也。陽谷咸池。やがて大地此會門外。故
せて作れる。と。説文解字を見ま。知べし。然れを池。其を續字ま。女會。因れる字なること。謂ふも更あり。博物志此古説了。子曰。乾動直靜專。坤動開靜翕。其根也。天根。毎日兩度。蹴入尾閭巨壑。則海沸出潮と有る如く。天日よて降る玄牡の氣勢也。毎日兩度咸入して。天易地會此構精あ

了。潮汐を以て池ある由れ名あり。是を以て黄帝書ふ。古字
玄牝之門。天地根と云す。然るは天地と分れし會門あり
ばあり。抑和漢の古傳に。天地の初めは。物大空に生れり
地と分れし。會易交感此形ありし物あるが。天日と天
玄牝の象を建し。大地は常は。その氣勢を以て。天日と常は
の彙籥以と謂ふ。是あり。此の資あり。然る小其玄牝天
物此生成あり。これ會易構精の大意あり。然る小其玄牝天
根。まゝ時く小女人の會う感ざる事あり。彼阿具沼。晝寐
し。は依賤女。まゝ少昊顛頊。あやむち小感せし。耀光虹
此如しと云ふ物。あれち。是あり。但し。此玄牝玄牝。此精義
地の実理。仰觀俯察して。細密に考へたる。説有れど。其
今古。小其百中。一字も云ふ。こと能く。然れど。斯計りの。端
緒ありとも。言定て。心得。ぐ。た。事。あり。む。と。如。此。を。記。し
於委く其義を。探。採。む。と思は。る。古史傳の。天地。初。発。此。條。

まゝ。禊祓の條と。赤縣太古傳の。黄帝此樂。名を咸池と稱ひ
三皇紀とを合せ。見て知るべし。黄帝此樂。名を咸池と稱ひ
しも。是池の名あり出づ。然れむ。唐堯の樂。名字。大咸也。云
す。依も。此義ある事。知べし。然。依。字。周礼。大司樂。大咸の。鄭注
小咸。皆也。池。施也。言。堯。德。無。所。不。施。也。と。有。る。孔。疏
云。る。た。都。は。故。実。を。辨。へ。さ。る。説。あり。は。て。此。咸。池。陽。谷。や
めて。速。鞞。此。湍。門。不。て。神。典。を。謂。也。依。速。吸。門。ある。お。就。て。思
ふ。此。よ。り。や。西方。筑。前。國。北。面。ある。玄。界。洋。ち。ふ。邊。に。
伊。邪。那。岐。大。神。の。禊。身。ま。せ。依。橘。小。戸。あり。抑。大神。さ。く。ふ。て
祓。除。を。爲。給。す。れ。ど。其。初。を。速。吸。門。を見。給。ふ。潮。太。く。急。し
と。て。橘。小。戸。を。禊。し。給。へ。る。哉。思。ふ。其。汚。惡。を。謂。也。る。大
塵。無。底。之。谷。と。依。速。吸。門。よ。り。根。國。へ。祓。ひ。給。は。む。との。御。事

小て。畏^{カレ}れど。此^{コト}時^{トキ}生^ナ坐^マ依^ヨ日^ヒ神^{カミ}月^{ツキ}神^{カミ}の御^ミ初^{ハジメ}浴^ユし給^{タマ}ひしも。
決^キ免^メて此^{コト}湍^{ハヤ}門^{カド}あらむ也^{ナリ}推^{オシ}察^カらる。是^{コト}事^{コト}れ精^{セイ}説^{セツ}ま^カ此^{コト}了^リ記^キ
の段^{ダン}と。太古^{コノコト}傳^{ツタ}の三^ミ皇^{ミコ}紀^キとよ。然^{シカ}ま^カば神^{カミ}世^ヨ子^コ神^{カミ}等^{ナリ}此^{コト}御^ミ禊^スは。
注^ツせるを合^アせ見^ミて知^チべし。大^{オホ}加^カこ此^{コト}水^{ミヅ}門^{カド}小^{コト}てぞ爲^ナ給^{タマ}ひらむ。故^{ナリ}その由^ユ緒^ツ不^レよ^レて。姫^{ヒメ}
嶋^{シマ}子^コ住^スめる義^ギ和^ワま^カ其^{コト}産^ウめ依^ヨ子^コ等^{ナリ}を常^{トコ}小^{コト}こ此^{コト}谷^ヤおて。浴^ユ
せし事^{コト}とよそ想^{オモ}たるれ。儲^{サテ}志^シり惟^{オモ}ひ續^ツくれむ。前^{サキ}了^リ顛^{テン}項^{キョウ}の
大^{オホ}壑^ク小^{コト}。其^{コト}琴^{キン}瑟^{シキ}を棄^スて正^マ堂^{ドウ}有^ルるも。謂^{イハ}ゆる祓^{ハラ}具^{モノ}子^コ棄^スて依^ヨ小^{コト}
て。是^{コト}は^カ大神^{オホカミ}此^{コト}御^ミ身^ミ小^{コト}附^ツ給^{タマ}ひし物^{モノ}ども皆^{ミナ}よ^ク小^{コト}棄^ス給^{タマ}ひ
し例^{レイ}を傳^ツへし態^{カタ}ゆるよと知^チ考^{カウ}し。然^{シカ}らむ彼^{カレ}國^{クニ}の沐^{ソク}浴^ユ禊^ス祓^{ハラ}
ま^カの所^{トコロ}爲^ナさ^カ子^コ小^{コト}。皇^{ミカド}國^{クニ}不^レ習^{ナラ}へる事^{コト}小^{コト}ぞ有^ルる。其^{コト}説^{セツ}文^{ブン}
を始^{ハジ}め字^ジ

書^{シヤ}ども子^コ祓^{ハラ}除^ス惡^{アク}祭^{マツル}也^{ナリ}。从^{シヨ}示^シ友^{トモ}色^{シキ}徐^コ曰^ク按^ア祓^{ハラ}之^ノ爲^ノ言^{コト}拂^フ也^{ナリ}。除^ス災^{サイ}
求^{モト}福^{フク}又^{マタ}絜^{セツ}也^{ナリ}。又^{マタ}除^ス也^{ナリ}と云^クひ禊^スはもと潔^{セツ}字^ジ小^{コト}て。臨^{リン}水^{スイ}祓^{ハラ}除^ス也^{ナリ}。
亦^{マタ}有^ルるを見^ミて知^チべし。皇^{ミカド}國^{クニ}の身^ミ潔^{セツ}祓^{ハラ}除^スは有^ルる趣^{ソウ}異^イるこ
と無^ク聞^クえし。○因^ツ了^リ記^キ我^ガ漢^{カン}風^{フウ}の号^{ナリ}子^コ大^{オホ}壑^クと稱^ナは
る事^{コト}也^{ナリ}。二^ニ十^{ジュウ}三^{サン}之^ノ時^{トキ}あり。一^{イチ}日^{ニチ}ふと。莊^{シヤウ}子^コの天^{テン}地^チ篇^{ペン}を
披^ヒきりる。東^{トウ}小^{コト}大^{オホ}壑^ク也^{ナリ}。いふ谷^コある由^ユよて。夫^{ソノ}大^{オホ}壑^ク之^ノ爲^ノ物^{モノ}
也^{ナリ}。注^ツ焉^ニ而^{シテ}不^レ滿^{マン}酌^{シク}焉^ニ而^{シテ}不^レ竭^{ケツ}。吾^ガ將^{マシ}遊^ユ焉^ニと云^ク。依^ヨ文^{ブン}を見^ミて。面^{オモ}白^{ハク}
く覺^{カク}え。其^{コト}項^{キョウ}漢^{カン}学^{ガク}を專^{セン}とせし時^{トキ}あり。深^シき思^シ慮^{リョ}もれく。去^キ
を号^{ナリ}とちて。物^{モノ}も記^キし。印^{イン}小^{コト}も作^{サス}りて在^アらる。十^{ジュウ}年^{ネン}は
り前^{マエ}より。大^{オホ}壑^クやがて玄^{ゲン}牝^{ヒメ}之^ノ門^{カド}。陽^{ヤウ}谷^コ咸^{ケン}池^チ百^{ヒャク}谷^コ王^{オウ}有^ルる事^{コト}を
知^チ了^リる。近^{チカ}頃^{キョウ}ま^カ神^{カミ}典^{テン}あり。速^{ソク}吸^{ソク}門^{カド}る事^{コト}を知^チ得^{トク}て。其^{コト}
やごと無^クき所^{トコロ}依^ヨを思^シひ。陋^{ロウ}き拙^{セツ}き已^イら^レ号^{ナリ}小^{コト}稱^ナへむ事^{コト}
は。畏^{カレ}く僭^{ケン}上^{ジョウ}る事^{コト}は思^シへど。年^{ネン}來^キ用^{ヨウ}ひ來^キりし号^{ナリ}ゆる事^{コト}
せむ方^{カタ}なく。仍^{シテ}是^{コト}号^{ナリ}用^{ヨウ}ふるを。元^{ゲン}こま不^レ意^イり出^デる事^{コト}子^コ
罪^{ツミ}を恕^シし給^{タマ}へや。儲^{サテ}加^カ扶^フ桑^{ソウ}大^{オホ}樹^{ジュ}也^{ナリ}。彼^{カレ}土^{ツチ}の海^{カイ}外^{ガイ}東^{トウ}方^{ホウ}也^{ナリ}。
る事^{コト}也^{ナリ}。諸^{シヨ}書^{ショ}の説^{セツ}符^フ合^{カフ}して。異^イ論^{ロン}ある事^{コト}れし。其^{コト}楚^ソ辭^ジ東^{トウ}君^{クニ}
歌^カ小^{コト}。噉^タ將^{マシ}出^デ今^{イマ}東^{トウ}方^{ホウ}也^{ナリ}。王^{オウ}逸^{イツ}注^ツ謂^ク日^{ニチ}始^{ハジ}出^デ東^{トウ}方^{ホウ}也^{ナリ}。照^{シヤウ}吾^ガ檻^{ケン}今^{イマ}扶^フ桑^{ソウ}也^{ナリ}。
○大^{オホ}扶^フ桑^{ソウ}國^{クニ}考^{カウ}上^{ジョウ}卷^{ケン} ○三^{サン}十^{ジュウ}五^ゴ

白也。檻、楯也。言東方有扶桑之木。其高万仞。日下浴於湯谷。上拂其扶桑。爰始而登。照曜四方。日以扶桑為舍檻。故曰照吾檻。今扶桑撫余馬。兮安驅云々。東君とは即日を稱也。まゝ上りも引る離騷。飲余馬於咸池兮。咸池、日浴處也。摠余轡乎扶桑也。摠、結桑、日所拂木也。折若木以拂日兮云々。哀時命。左祛挂於搏桑。右祛拂於不周兮云々。れど亦有之。不周、崑崙。西極之山。此名を説くを見るべし。此文を西極の不周山と東極の扶桑とを對して。道德の盛大にして。包ざる所なきを比へるあり。呂氏春秋求人篇。禹東至搏木之地。為欲篇。北至大夏。南至北戶。西至三危。東至扶桑。不敢亂矣。高誘注。亂、猶離也。淮南子天文訓。日出於暘谷。浴於咸池。拂於扶桑。是謂晨明。暘谷、本名咸池。と云。上り非る離騷の辞。合せて思ふ。暘谷の一名あるを。出於暘谷。浴於咸池。と云へるは。上り云々。如く互文。

登於扶桑。爰始將行。是謂朏明。至于曲阿。是謂旦明。云々。朏、明將明也。且明、平旦也。と云へり。地形訓。世界此大九州の名字出せる所。正東陽州。曰申土也。見え扶木在陽州。日之所噴。とも登保之山。暘谷搏桑。在東方。高誘注。暘谷、日之所出也。搏桑、在登保之山。東北方也。とも有る。論、以無し。漢以來此詩賦のるを。今計ふる。暇あらば。其を。以て其搏桑此字義を。許慎が説文解字。木部。搏字。搏桑、神木。日所出也。從木。專聲。段玉裁云。搏、下。曰。日初出。東方湯谷所登。搏桑、最木也。然則搏桑、即最木也。東。下。曰。從。日。在。木。中。杲。下。曰。從。日。在。木。上。皆謂搏木也。淮南子。高注。亦曰。搏。同部。小扶。を。扶疏。四布也。從木。夫聲。段注。扶。汲。桑。日。所。出。也。手。非。也。今。依。玉。篇。五。音。韻。譜。集。韻。類。篇。正。扶。之。言。扶。也。古。書。多。作。扶。疏。同。音。假。借。也。上。林。賦。垂。條。扶。疏。劉。向。傳。梓。樹。生。枝。葉。扶。

疏上出屋楊雄傳枝葉扶疏呂覽樹肥無使扶疏是則扶疏謂
大木枝柯四布疏通作胥亦作蘇鄭風山有扶蘇毛曰扶蘇扶
胥木也 它見え扶樽とも小徐鍇が音註も防無切と有る然
れを諸書小扶字を書ふ協を假借して正あらざ凡て扶字
小改むべきありと有りて是も防無切あり 扶と説文の佐也从手夫邑
日初出東方湯谷所登樽桑桑木也 段注按當云桑木樽桑也
樽桑已見木部此処立文當如是離騷總余嘗乎扶桑折若
木以拂日二語相聯蓋若木即謂扶桑扶若字即樽桑字也象
形蔽翳凡桑之屬皆从桑と見え徐鍇が音註も而灼切と言
ひまゝ通釈了桑木即樽桑十州記説樽桑兩相扶故从三
又象桑之婀娜也爾雅注曰婀娜垂條也此又不音右直象
形耳東方木德故有神桑を蠶所食葉木从桑木と見え徐鍇
の通釋小異於東方自然之神木加木以別之自然桑字象形

而簡也斯郎反と云へ段注ま樽桑者桑之長也故字从
也息郎切此等此説に依れ扶樽とも小其音夫る扶桑
と云へり此等此説に依れ扶樽とも小其音夫る扶桑
此桑はもと桑字書れ其音は而灼切若あれば扶桑を
フジャクを唱ふべき哉フサウと唱ふ桑字書よる
起れる後此訛音あり桑を通釋する斯郎反と有れ音サウ
れとど其を蠶は食ふ常の桑樹小用ある時こそ有れ樽桑
と熟字せる桑をば古小従りてジャクを唱ふべき著
明あり古今韻會小若字此所る若木東海木名也と見え説
文の段注も若木即謂扶桑扶若字即樽桑字也
有り字彙も桑を而灼切音若日初出東方湯谷所登樽桑桑
木也と云ひ若字の註も音弱若木名あり上引る
る説文及び通釈と思ひ合ふべし○まゝ小林元儻云桑字
此音若ある故中村蘭林の学山録も楊慎が答李仁史書

を引きて。日之為字。有人忍任。且是其四色。其音若。音熱。是其切響。音若。日生於若木。故毛詩之音叶之。音熱者。日本陽類。而影炎。故楚辭之音叶之。今楚南方言。猶呼日頭為熱頭。是其證也。と見也。あや音ジヤク。又セツあるべきこと。識考得るり。其在中は草の初生。葦牙の萌出。依負して。生青出申。黄若。あど皆此字。子因て製れる。あ。其は豫て。承たれる。書を作らむ。して。及木。即博桑也。や有。色む同木。あ依こと論。時云べし。いあきを。山海經淮南子外。と。東海北扶桑也。は別。若木。や名くる樹。れ有るは。所以ある事。あ。其を尸子。小。大木之。奇靈者。為若。とも。木食之人。多。為仁者。名。為若木。とも有りて。東方。北。真若木の奇靈。あ。るよ。他木の奇靈。れ依。字も然。を名けし。あ。尸子。れ全書を。早く。い。び。と。今引く。文。を。然。る。山海經の郭注。を引。るを。再。引。る。あり。然。る。を。山海經。大荒北。經。大荒之中。有。衡石山。上。有。赤樹。青葉赤。

華名曰若木。西山經。多。搖木之有。若。れ。と。有。依。是。あ。わ。大荒の文意。え。赤樹。やいふ木あり。青葉赤華。あるが。若木。よ。似。る。故。若木と名くと云。り。空聞え。西山經の文意。を。木。の。奇靈。あ。して。若木の如き。が。多。し。と。云。る。意。と。聞。え。り。其。を。郭璞注。り。右。よ。舉。る。尸子の文。を。引。ま。て。此。を。共。り。真。此。若木。あ。ら。稱。ど。若木。や。名。り。る。趣。ま。海内經。に。南海之内。黒水。青水之間。有。木。名。曰。若木。若水。出。焉。と。有。る。も。彼國の海内南方。あ。れ。む。真。若木。小。非。以。此。を。晉。北。稽。含。が。南方。草。木。狀。り。朱槿。花。莖。葉。皆。如。桑。葉。光。而。厚。樹。高。止。四。五。尺。而。其。花。深。紅。色。五。出。大。如。蜀。葵。云。と。有。る。樹。を。本草。綱。目。小。扶。桑。と。も。名。け。り。李。時。珍。が。言。依。え。疑。ぬ。く。此。樹。れ。也。此。木。何。頃。より。皇。國。を。作。り。て。人。れ。見。る。物。あ。依。が。朝。開。暮。落。の。花。み。て。木。槿。や。云。ふ。木。の。類。あ。る。が。聖。木。れ。ど。云。べ。き。樹。を。非。也。ま。と。甚。く。寒。氣。

を恐る。まゝ淮南子地形訓南方荒外此所小若木在建木
西末有十日其華照下地と有依を眞の若木は扶桑あるを
あゝ凡て大樹の奇靈ある哉若木とも云よとして其眞物
知らぬ若木。扶桑は形状を混雜しよ依あり其末有十日
日や云るが扶桑小謂也依説ゆるを以て辨ふべし。但し末
と云依事を上よ云へれど猶三五。ちて山海經右此と
本國考の末條了謂ふよも見べし。ちて山海經右此と
記せるよ。若木扶桑也異木此如く聞ゆる故小楚辭子摠
余鬱乎扶桑折若木以拂日と詠ぜるを始め對句おも作れ
る文章とも此多たぞかし。其を彼阮籍が詩若木鬱乎四海
賦扶桑臨于海上若木照于崑崙瀛州や云ひ揚燭が渾天
國の書りも扶桑略記崇峻天皇元年百濟より佛舍利を

献れる時の表文を載る中伏請陛下照佛日於若木之
郷掩慈雲於扶桑之邑也何也然きを書等小東海中若木
國と云ふ國ありと云ふ説の聞也。ちて其扶桑神本何所小
在りしや云こと後よを知ら成ぬきと上古小扶疏して
在りし間也彼國の地方より能く見えよ依故其古傳は
遺れるなり其を山海經東山經子流沙三百里至于無臯之
山南望幼海東望樽桑と有依字以ても辨ふべし。但し此を
より見ゆる耳あら交世此初よを扶桑の地より神眞ち
の多く往來ひて在る故其語り傳へもあゝ遺れるあ
て其由を三五本國考よ論ふを見べし。彼國よと望放れを天日は直り其神本
よと出ること見えし故右の如く傳ふまゝ東杲杳れど
此字も此木小依りて制れるなり其を説文小東動也從木

官溥說從日在木中它見え。

徐鍇が通釈。東方万物所甲冑。萌動平秩東作。故為動也。と云へり。

前漢歷志。東方東動也。易氣動物於時為春。と云ひ。説文段注。木。榑木也。と云へり。黃帝本行記。此注

小。東者動也。日出万物乃動也。東字從日穿木。以日出望之。

穿扶桑之林木也。あど有也。韻會。東字の所。鄭氏曰。木若

東。在下。曰。杳。廣韻。春。方也。あども云へり。あ。杲字小。明也。从日在木上。と云ひ。杳

字小。冥也。从日在木下。と有る通釋。按淮南子曰。日出于暘

谷。拂于扶桑。是謂晨明。故東字。日在木中。登于扶桑。是謂朏明。

故杲字。日在木上。詩曰。杲々出日也。史記天官書曰。日晡則反

景上照于桑榆間。故杳字。日在木下也。外紀云。依子。知べし。

諸字書ども。皆此説字取りて。杲字を日出。又明白也。と註

し。杳字を冥也。深也。寬也。寂也。あど注せれど。南西北の字子

え。木よ縁あ。説何る事。あし。ちて本文子。湯谷上有扶桑。有黑齒。北也。有れ

は。扶桑何る域の下。暘谷あ。黑齒ま。其間。と著

明あ。是を以て上。引る呂氏春秋。東至榑木之地。青丘

之郷。黑齒之國。と有ると同じ事を。淮南子脩務訓。東至黑

齒。と云ひ。主術訓。東至暘谷。あど云へ。あ。帝王世紀。劉

編。あど。其餘。も。あ。嶽瀆名山記。扶桑山。在東海中。日之

所出也。と見え。大荒東經。大荒之中。有山。名曰。孽搖。顛。上

有扶木。柱三百里。其葉如茶。郭璞云。柱猶起

あ。此文中。顛。此字。孽。搖。小連。孫。て。四字の山名。あ

る。心。得。あ。説文。顛。頭。大也。顛。牡羊也。と有り。然れ

む。加の熊耳山。牛頭山。あど。例。て。羊。小。似。る。義。を。以

四字路の山ねらむも知らざり。今姑く類推此字をば用ひ。は上小引
定め難れれむ。今姑く類推此字をば用ひ。は上小引
依地形訓の高誘注。樽木在登保之山や云るを思ふ。樽
桑木此所在也。我が易州申土の一高山此上りて。其山の名
を藤搖山やも。登保山やも。扶桑山とも稱ひ。然る其山に有
る一州を。扶桑國と云。依こ。空著く。加於其樹上。温源谷と
名けし。上池も有。しと聞。然る老大樹。し有れ。だ。
然も有。べき事ある。其所在詳。郭璞注。温源。即湯
也。右の文。まが藤搖といふ山ありて。其山上。扶木
り。其扶木。谷ありて。其名を温源といふ。義あり。湯谷の
海中。在。とは。元より別。る。空論を。後。但し。上池
谷と云。は。む。事。い。あ。思。ふ。も。有。る。れ。此。国。在。り
て。彼。国。より。望。め。る。程。の。大。樹。を。谷。と。も。云。べ。き。上。池。の
有。る。も。何。う。疑。は。む。上。池。と。立。木。の。空。り。水。は。湛。へ。し。を。謂

ふ語あり。温源と云るを思へむ。其。上。第。四。條。子。引。る。名。山
上池の水。温れりしと聞え。上。第。四。條。子。引。る。名。山
記れ文。東岳廣桑山。在。東海中。青帝所都。と有。依。山。そ。れ。名
は。相。似。れ。れ。ど。此。を。既。小。云。る。如。く。游。能。基。呂。嶋。み。て。東。岳。を
水。を。別。山。あり。是。を。以。て。名。山。記。す。扶。桑。山。は。別。小。舉。る。也。
思。ひ。混。ふ。誇。う。ら。ま。五。岳。れ。こ。と。漢。土。内。あ。る。泰。山。等。の。五。岳
岳。を。知。る。人。あ。し。実。を。海。外。の。が。天。皇。太。帝。は。植。給。ひ
し。眞。五。岳。を。彼。国。内。を。謂。ゆ。五。岳。を。擬。五。岳。あり。其。由。委
く。は。太。古。傳。り。云。へ。れ。ど。其。概。し。て。其。易。州。扶。桑。は。神。域。や。が
畧。を。天。柱。五。岳。考。り。も。云。べ。し。は。其。易。州。扶。桑。は。神。域。や。が
て。皇。國。の。由。也。其。域。より。渡。り。て。彼。國。を。開。闢。し。其。民。を。教
化。せ。し。神。聖。の。功。績。を。諸。書。小。參。攷。を。依。り。悉。く。我。が。皇
神。こ。ち。れ。事。迹。小。符。合。し。う。於。皇。國。を。お。ま。て。然。る。神。眞。の。本



州ふる國を。南西北の三方を更ぬる。東方も別有る。有る。
 無きを以て是字知れり。こは三五本國考。其神聖とち。彼
 云ふ事。概畧を述す。斯く此神州の上古に在る趣を。東方
 朔が十州記を精う。こらる。此人固より仙風道骨の人にて。
 太上の眞官とる。谷希子といふ靈仙の伴はきて。凡人に得
 到。依まじ。其境界をも見廻り。まゝ其師の語れ。依古説をも
 聞集めて。十州記を録せ。依よし。本書小自記せり。然る小後
 人。比加筆も往く見え。其を擇びて取る。
 次卷は。魏叢書。雲笈七籤。龍威秘書。列仙通紀。おどろ。收。依本。ども。字。校合して。奉。る。あり。谷希子。を。第四條。小引。ふる。清靈眞。人。傳。り。東。到。青。丘。遇。谷。希。子。と。有。る。皇。國。の。神。人。あり。太。古。傳。を。見。て。知。る。は。し。

